

■「ちくま評論入門」解説——読解問題への過程

21 丸山眞男「人間と政治」

●参考 丸山眞男『日本の思想』【121/M9/1b】(北野高校図書館)

『丸山眞男集・一六卷』【310/M3/4】(北野高校図書館)

丸山眞男『忠誠と反逆』【311/M1/4】(北野高校図書館)

長谷川宏『丸山眞男をどう読むか』【311/H5/1】(北野高校図書館)

■目標 政治を思想的・本質的議論と結びつける／現実の政治に対する批判的な視点を獲得

■丸山眞男

丸山眞男(眞男)(1914—1996)は、日本の戦後を代表する政治思想家。超ビッグネーム。大学行って「丸山眞男って聞いたことない」とかいうてたら、バカにされます。現代文の教科書にも載ってます。百科事典から略歴・評価を紹介しておく。

●政治学者。大阪市出身。東大卒。東大法学部教授。第2次大戦中に、近代政治学を踏まえた独創的な方法による日本政治思想史の研究を執筆・発表。戦後いち早く、天皇制ファシズムの内面構造を鋭く分析する(軍国支配者の精神形態(超国家主義の論理と心理)などを発表して思想界に大きな影響を与えた。思想史研究としては、荻生徂徠を中心とする近世の儒学、一貫して関心を寄せた福沢諭吉の思想、さらに日本の思想を基底する(原型)的意識などに注目、洋の東西を問わぬ該博な知識と強靱な分析力、機知にとんだ卓抜な表現と構成力によって、専門研究の枠を超えて広く読まれる、優れた作品を残した。また主体的な批判精神とリベリズムに基づき、現実政治についても積極的に発言、1960年の安保反対闘争では、竹内好(よしみ)、鶴見俊輔らとともに、知識人の行動の中心的な役割を担った。主な著書に《日本政治思想史研究》(1952年、英訳1974年)、《日本の思想》(1961年)、《増補現代政治の思想と行動》(1964年)、《文明論之概略》を読む》(1986年)など。《丸山眞男集》がある。(百科事典マイペディア)

●思想家、政治・歴史学者。大阪生まれ。父は丸山幹治(かんじ)。1937年(昭和12)東京帝国大学法学部卒業。助手を経て1940年東大助教。戦後(1953)一書にまとめた『日本政治思想史研究』を、戦時下『国家学会雑誌』に5年間掲載して応召。1950年(昭和25)東大教授、1971年辞職。東大法学部では、東洋政治思想史という広範で未開拓な分野の講座を一貫して担当。一方、主著『増補版・現代政治の思想と行動』(1964、初版は1956〜1957)では、ナショナルリズム、ファシズム、超国家主義、天皇制、明治維新、近代化政治などの論から、ソ連のスターリン体制や中国共産革命の批判に至るアクチュアルで同時に原理的な評論を集大成して、戦後の思想界に主導的な役割を果たした。何々の「思想と行動」という言い方は一種の流行語ともなり、この論集の後記に書いた「私自身の選択についていうならば、大日本帝国の“実在”よりも戦後民主主義の

- 1/9 -

“虚妄”の方に賭(か)ける」ということは丸山政治学の全体を象徴している。彼の戦争中の青春期モノメントといえる『日本政治思想史研究』は、江戸時代の儒学者荻生徂徠(おぎぎゆうそらい)から国学者本居宣長(もとおりのみなが)に至る思想展開の過程に近代化の萌芽(ほうが)をみいだす仕事で、戦後の近世史や宣長研究の礎石を築くものとなった。晩年『文明論之概略』を読む』(岩波新書上中下、1986)を発表、『日本の思想』(岩波新書、1961)とともに、啓蒙(けいもう)実践の学者の面目、躍如たるものがある。／『現代政治の思想と行動』増補版(1964/新装版・2006・未来社)▽丸山眞男著『戦中と戦後の間——1936—1957』(1976・みすず書房)▽丸山眞男著『後衛の位置から——「現代政治の思想と行動」追補』(1982・未来社)▽『日本政治思想史研究』新装版(1983・東京大学出版会)▽『文明論之概略』を読む』上中下(岩波新書)▽『日本の思想』(岩波新書)(日本大百科全書(ニッポニカ))

ひとことというなら、日本の民主主義の可能性を説いた思想家、といえる。「大日本帝国の(実在)よりも戦後民主主義の(虚妄)に賭ける」ということは、象徴的だ。どんな論理と心理が、あの愚劣きわまりない戦争を遂行させたのか、その鋭利な分析でデビューした丸山は、まだ実現していない「日本の民主主義」がいかにして可能か、という問いを、思想的に、また、実践的に追求した。これは丸山個人の問いではなく、戦争をくぐり抜けた多くの日本人の問いだった。——そして、この問いは、いまだ、私たちの問いとして継続している。

前回の「超国家アメリカ」の続きとして捉えるなら、その問いは、アメリカのデモクラシーの普遍性を、日本というナショナルな土壌にいかにして根付かせるか、という問いだといえる。普遍性を持つ思想と実践の種子が、ある特殊な歴史と文化をもった社会(閉じた社会)でどのように育つか。この問いは、日本文化とは?という問いも誘発する。だから丸山は「日本の思想を基底する(原型)的意識」を探ろうとした。ある普遍的な知恵(デモクラシー)を、自閉した視点から拒否することは、再び、自閉と狂信と暴力の時代を呼ぶ。外側からやってきた思想を、内側からわがものとしてつかみ直すという、成熟への試みがこの国の戦後だったということを、丸山の軌跡は教えてくれる。

■追跡

① 政治を真正面から問題にして来た思想家は古来必ず人間論(アントロポロジー)をとりあげた。そしてこれには深い理由がある。

「政治を真正面から問題にして来た思想家は、なぜ、必ず人間論をとりあげたのか?」。これが問い。アントロポロジー【Anthropologie】は、人間学、人類学とも訳される。

② 政治の本質的な契機は人間の人間に対する統制を組織化することである。統制といい、組織化といい、いずれも人間を現実^{リアル}に動かすことであり、人間の外部的に実現された行為を媒介としてはじめて政治が成り立つ。従って政治は否応なく人間存在のメカニズムを全体的に知悉^{ちしつ}していなければならぬ。たとえば道徳や宗教はもっぱら人間の内面に働きかけ

る。従ってその働きの結果が外部的に実現されるかどうかということは、むろん無関心とはいえないけれども、宗教や道徳の本質上決定的重要性は持たない。内面性あるいは動機性がその生命であるがゆえに、たとえ人が外部的に望ましい行為をやったとしても、偽善や崇りへの恐怖心からやったのでは何にもならぬ。ところが、政治の働きかけは、必ず現実に対象となった人間が政治主体の目的通りに動くということが生命である。現実に人間を動かし、それによって既存の人間関係あるいは社会関係を、望まれていた方向に変えることが政治運動のキーポイントである。

政治の本質論。◎「契機」(ドイツ語 Moment)とは、ある物を動かし、決定する根拠や要因のこと。「きつかけ」という意味で、今はよく使われるが、本来の意味は違う。丸山は、それがなければ、政治とは言えない要素、という意味で使っている。

「人間の人間に対する統制を組織化する」をかみ砕くと、「人間が、別の人間たちを統制(コントロール)する、そのやり方を(その場限りや一対一ではなく)組織的に(たくさん)の人間でシステムとしてやる」という感じだ。よくわからないとき、こういう「かみ砕き」は、有効。

道徳との対比を通じて、主旨を捉えよう。

道徳(宗教)では、内面の正しさが大事だから、「外部的に望ましい行為をやったとしても、偽善や崇りへの恐怖心からやったのでは何にもならぬ」。

政治では、「現実には、その人間が政治主体の目的通りに動く」ことが大事だから、内面がどうであるかは、関係ない。

道徳⇒見えない心が大事。

政治⇒目に見える行為が大事。

聖職者は、人々が心安らかに、各自の内面に神の国を実現してくれることを目的とする。

王様(政治主体)は、人々が王の命令に従って秩序ある行動をとることを目的とする。

こんなふうに対比してみたら、わかりやすいかもしれない。まずは、見えない(心)／見える(外面的現実)の対比を押さえる。

③ 現実には動かすという至上目的を達成するために、政治はいきおい人間性の全部面にタッチすることになるのである。たとえば学問の人間に対する影響力はもっぱら人間の理性的部分を対象とする。従って学問的説得は、あくまで理性による理性に対する説得であり、相手が説き手の弁舌に感心したり、まるめこまれたり、あるいは説き手の人間的魅力にひきつけられてその説を承認したとしても、それは学問的説得とはいえない。恋愛の働きかけはもっぱら———というと言いきりすぎだが少なくとも大部分———人間の情動に訴えようとする。また商品取引というような経済行為の働きかけは主として人間の物質的欲望に訴える。これらに対し政治の働きかけは、理性であろうと、情緒であろうと、欲望であろうと、人間性のいかなる領域をも必要に応じて動員する。要するに現実には動かすのが目的なのだ

- 3/9 -

ら、政治には働きかけの固有の通路がない。宗教も、学問も、経済も、それが政治対象を動かすのに都合がよければいつでも自己の目的のために使用する。だから逆にいうと、宗教なり学問なり恋愛なりの働きかけで、手段と目的との一義的連関を失って、要するに相手を自分に従わせること自体が至上目的となったときには、それはすでに自己を政治的な働きかけにまで変貌しているのである。

「動かす」ということばに、「力」の存在を読み取っておこう。目的のためには、どんな領域も使う、力として有効なら。それが、政治です(笑)。

政治的になってしまった恋愛のなれの果て(ストーカー、DV、セクハラ)、学問のなれの果て(データねつ造、教授のパワハラ、産学協同、研究資金調達、権力と結託した学校設立(笑))、経済のなれの果て(権力と結託した……)。まあ、実例に事欠かない我が社会よ。

読解問題 1 宗教や道徳、学問と対比して、政治の特色はどんな点にあるか。

②③段落から。「宗教、道徳、学問」とくくられているから、②段落からは、これらの内面的な心情・理性、という側面と、政治の、外面的な現実、という側面を対比。③段落からは、目的に応じた手段とする領域の限定、と目的のためには手段とする領域を問わない点を対比。このふたつの対比をきれいに組み立てるのがお仕事。

宗教、道徳、学問は……。それに対し政治は……。

解答例(二文)「宗教、道徳、学問は、心情や理性といった内面への働きかけを目的とし、それぞれの目的に応じて、その手段としての領域を限定している。それに対し政治は、人間を目に見える形で現実に動かすことを目的とし、その目的のためには、あらゆる領域を利用しようとする。」

解答例(一文・短縮)「宗教、道徳、学問が、内面的な働きかけを目的とし、その手段として固有の領域を持つのにに対し、政治は、人間を外面的に現実に動かすという目的のために、あらゆる領域を利用する点。」

④ 政治にとって政治目的通りに現実が動くということが生命だから、実際政治家の言動はたえず「効果」によって規定される。真理に忠実だとか自分の良心に忠実だとかいうことよりも、一定の言動なり事件なりが「味方」にどう影響するか「敵」をどう利するかということがつねに彼の羅針盤になっている。

⑤ 従ってまた政治家の功罪に対する批判もどこまでも彼の政策が現実にもたらした結果によって判断されるべきであり、彼の動機の善悪は少なくとも第一義的な問題とならない。政

政治家の責任は読解問題2 徹頭徹尾結果責任である。

悪そうだけど、力のある政治家、というのがいた。いろんな外交ルートを使い、圧力や懐柔や、さまざまな手段を使い、自国に有利な妥結点を導き出す——とかいうイメージ。直観的には、ここでいわれていることは理解できるだろう。

⑥ ともかく政治家がもたら現実の効果を行為の規準にするところから、政治家はある意味で俳優と似て来る。例えばアジテーションの演説に巧みな政治家はそのポーズや発声法の効果に絶えず腐心する。背後の現実の自己と、効果を考えての「演技」とは遊離しがちである。そこに政治的なものいやらしさが発生する。「政治をするものは悪魔と手を結ばなければならぬ」(ウェーバー)とか「政治は人間を墮落させる」(ビスマルク)とかいわれ、とかく政治は何か不潔なものと本来的に結びついて見られるが、その大きな原因は結局、政治が人間を現実的に動かして、ある結果を確保するということを本質的要因とするからで、実は政治がきたないというより、現実の人間そのものが、あいにく天使に生まれついていないのである。

「現実の人間そのものが、あいにく天使に生まれついていない」というのはおもしろい。私なら、ここを設問にするなあ。人間は汚い。自分だけよかつたらいいと思っている。あるときは、自閉した妄想に取り憑かれている。それも、色とりどりに勝手な考えで、猿のようにざわついている。そんなやつらを、「現実に動かす」には、脅したり、すかししたり、演技したり、いろいろやらなくてはならない。

学校の先生もあつて政治家であり、俳優である。小なりといえども、「権力」みたいなものを先生は持っている。「先生は、悲しいぞ」と泣いて見せたりするわけだ。親が「お母さんは、悲しいわ」と説諭するのも似たようなものか。いや、先生や親は、政治家よりは純粹ですよ。

読解問題2 「徹頭徹尾結果責任である」とはどのようなことか。

何を聞こうとしているのか、何を答えたらいのか、迷ったら、とにかく☆傍線部延長術。形式段落全体にのぼしてみよう。

「政治家の功罪に対する批判もどこまでも彼の政策が現実にもたらした結果によって判断さるべきであり、彼の動機の善悪は少なくとも第一義的な問題とならない。政治家の責任は徹頭徹尾結果責任である」

これをわかりやすくする。☆自分の語彙に消化する。「政治家に対する評価は」という主語でやってみようか。内容がぴんときていれば、言い換えは、さほど困難ではない。

解答例(本文語句利用) 「政治家に対する評価については、動機の善悪は考慮されず、彼

- 5/9 -

の政策が現実にもたらした結果によってのみ判断されるということ。」

解答例(自分の語彙で) 「政治家は、動機がいくらよくても、政策が現実に結果をもたらさなければ、その責任をとらなければならないということ。」

⑦ 政治の予想する人間像というものは、昔からあまり美しくないことに相場がきまっている。カール・シュミットなどは「真の政治理論は必ず性悪説をとる」とすらいつている。たしかに政治的なものと真正面から取り組んだ思想家はいわゆる性悪論者であった。東洋でも政治(治国平天下)を個人道徳(修身)に帰属させた儒家が性善説をとったのに対し、法や政治の固有の意義を強調した荀子や韓非子の系統は多かれ少なかれ性悪論者であった。ヨーロッパでマキアヴェリやホッブスのような近代政治学の建設者が、いずれも徹底した悲観的人間論者であったことはよく知られている。マキアヴェリは有名な『君主論』のなかでこういつている。

⑧ 「人間というものは恩知らずで、移り気で、陰険で、危険にあうと逃げ出し、そのくせ転んでもただは起きない。利益を与えれば味方するが、いざ犠牲を捧げる段になると、たちまち尻をまくって逃げ出すものだ」

漢文でも学んだ古来からのふたつの人間観。「性善説」「性悪説」。おなじみの孔子↓孟子ラインは、性善説。「君子」の可能性を説いた。法や監視を強めて秩序維持を図ろうとする方向は、性悪説に立っている。

どちらの面も併せ持つのが人間なのだろうが、そのどちらに重点を置こうとするかによって、法、政策、そして、教育のあり方にもバリエーションが生じる。

ある人間が、人間をどのようなものとするか、は、その人間がどのような経験をしたか、その人間がどのような人間たちを見ているのか、によっても変わる。たまたま生まれついた時代や環境が、人間観を変えるだろう。あなたはどうか？

そして、読者の興味は、筆者丸山はどうなのか、というところにも向かうだろう。

⑨ ホッブスが「人間は人間に対して狼である」といい、人間は本来エゴイスティックなものだから、政治社会なき人間の状態(自然状態)は必然に万人の万人に対する闘争を現出するといつて、そこから強力な専制権力を基礎づけて行ったのはあまりにも有名である。

ホッブスについて知ろうとするなら、たとえば、大澤眞幸『社会学史』(講談社現代新書)の2章などがいい。【361/012】北野高校図書館にある。

⑩ こういう性悪説は昔からあまり評判がよくない。道学先生からは眼の仇にされる。しかしそれは一つには、マキアヴェリやホッブスの方が道学先生よりも、人間の、従って政

治の現実をごまかしたりヴェールをかけたたりしないで、直視する勇氣を持っていたというだけのことであり、もう一つは、性悪説の意味を誤解しているためである。ホッブスは性悪というとすぐ憤激する手合いにこう答えている。

道学先生とは、儒家（孔子↓孟子ライン）のことだ。丸山は、道学先生に批判的であることに注意。性悪説思想家は、①現実を直視②性悪の意味を正しく捉えている。正しくつて？

⑪ 「自分自身のことを考えて見るがいい。旅行に出るときは武器を携え、なるべく道づれで行きたがる、寝るときにはドアに鍵をかけ、自分の家にあつてさえ箱に鍵をかけるではないか。しかもちゃんと法律があり自分に加えられる一切の侵害を罰してくれる武装したお役人がいることを知っていてさえこれである。」

悪い人間がいる可能性。それに備える。それはふつうのことじゃん。

⑫ しかも素朴な性善説やヒューマニズムの立場は、人間関係のなかで現実的に行動する段になると、万人に内在すると信じられた「善」を押しつけることによって、かえって客観的には非常に残酷で非人間的な結果をもたらすことが少なくない。ソレルは『暴力論』で鋭くこの逆説を指摘している。

善の押しつけ。詳しくは論じられていないが、「万人に内在すると信じられた善」という言い方には、「超国家アメリカ」に出てきた「普遍的イデオロギー」のおおいがする。人間ならば、理解できるはずの善を理解できないということは、あなたは人間じゃないのね！ そういう反転が生じるというケースを想像してしまう。あるいは、善の権力というべきものが、内面の自然をねじ曲げてしまうとか。

⑬ しかしそういうことを別としても、政治が前提する性悪という意味をもっと正しく理解しなければならぬ。性悪というのは、厳密にいうと正確な表現でないで、じつはシニシット自身もいっているように、人間が問題的 (problematisch) な存在だということにはかならず。前にもいった通り、効果的に人間を支配し組織化すること、それをあくまで外部の結果として確保して行くことに政治の生命があるならば、政治は一応その対象とする人間を「取扱注意」品として、これにアプローチしてゆくのは当然である。読解問題3性悪というのは、この取扱注意の赤札である。もし人間がいかなる状況でも必ず「悪い」行動をとると決まっているとすれば、むしろ事は簡単で本来の政治の介入する余地はない。善い方にも悪い方にも転び、状況によって天使になったり悪魔になったりするところに、技術としての政治が発生する地盤があるわけである。

性悪とは、百%の悪を意味しているのではない。善い方にも悪い方にも転びうる要注意の存在だ、という意味だ。それがここでの主旨である。筆者もこれに同意しているように見える。

そして、ここは、冒頭の「政治を真正面から問題にして来た思想家は、なぜ、必ず人間論をとりあげたのか？」という問いへの応答になっていることに注意。

答えは、政治は、複雑でやっかいな人間の行動を扱う技術だから、だ。政治の対象は、現実の人間の行動。しかし、その人間というヤツは、よかつたり、悪かつたり、取扱注意の代物。自然物のように、思い通りに制御するのは難しい。しかし、しなければならぬとしたら、その複雑さを、現実的にしつかり捉えなければならぬ、というわけだ。

読解問題3 「性悪というのは、この取扱注意の赤札である」とはどのようなことか。

ここもまた、この段落全体を消化する作業になるが、注意すべきなのは、☆比喩のいいかえ、を求められている点。まずそこを吟味しよう。

「性悪というのは、この取扱注意の赤札」の「赤札」って？ 品物・荷物に貼つてある札だ。「われもの」とか書いてあるような。ここでは、品物は「人間」、札には「性悪」と書いてある。「注意してね、われものだよ」＝「注意してね、悪いコトするかも」。そういうつもりで扱うべし、という注意書きだということだ。割れるかもしれないし、割れないかもしれない。でも、割れやすいから、割れないように注意してね、というのが同じだ。人間は、悪いことをするかもしれないから、注意して扱わなければならない、ということ。

これが、比喩をいいかえた答え。設問の要求が四十字ならこれでおしまいが、一〇〇字を超えるなら？ それに最後の問いだし。——ここに足すべきニュアンスは、「百%悪だといってないよ」「この赤札貼つとくほうが有効だよ」ということだ。

この段落を適宜言い換えていくと、

「効果的に人間を支配し組織化し、外部的結果を生むためには、政治は人間を「取扱注意」品として扱うべきだ。性悪説は、人間は、悪いことをするかもしれないから、注意して扱わなければならない、ということを意味している。人間は、善い方にも悪い方にも転ぶ複雑な存在であるから、(それに対応できる) 技術としての政治が必要となる。」

どういう論理にすると、問いに対応する形にできるか。☆文末から決める、のが有効だろう。問いに対する☆端的な答え、は、「注意せよ、を意味する性悪説に立つほうがいい」ということになる。文脈上、性善説対性悪説になっているからだ。そこに、理由を足す。前に、足す。「———するためには、———の方がよい」。たとえばこんなふうには。

解答例 「完全な善または悪ではない複雑な存在である人間を、効果的に支配し、目に見え

る結果を生むためには、人間は悪いことをするかもしれないから、注意して扱わなければならないということの意味する性悪説に立つ方が有効であるということ。」

頭でつかちな感じもあるので、

「人間は、完全な善または悪ではない複雑な存在であるが、その人間を——、」とする手もある。

■読解問題

- 1 宗教や道徳、学問と対比して、政治の特色はどんな点にあるか。
- 2 「徹頭徹尾結果責任である」とはどのようなことか。
- 3 「性悪というのは、この取扱注意の赤札である」とはどのようなことか。

■発展問題

本文が示す政治の原理論、人間観を踏まえた上で、現在の、現実の政治家の行動について論ぜよ。いいかえれば、政治家の内面性・倫理観はほんとうに問われなくてもいいのか、という問いである。

●重要語「自然権」 法で規定される以前に、人間が生まれながらにもっている権利。ホッブズは、自分が生きるためには何をしてもいい（「羅生門」の老婆の理屈やね）、この権利だけを認めることから、論理を組み立てた。ロックになると、生命のみならず、自由、財産の権利が加わる。基本的人権と呼ばれるものの基礎が、これらの自然権である。

アメリカの独立宣言は、自然権の思想を典型的に表している。「われわれは、自明の真理として、すべての人は平等に造られ、造物主によって、一定の奪いがたい天賦の権利を付与され、そのなかに生命、自由および幸福の追求の含まれることを信ずる」とある。権力がこの自然権を侵した場合には、自然法上の抵抗権が生ずる。日本国憲法が「この憲法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在及び将来の国民に与へられる」（11条）と宣言しているのも自然権思想の表れである。